「荒川氾濫」で 81 駅水没・経済活動まひ

写真は東京新聞 11 月 6 日朝刊「こちら特報部」。巨大都市東京の災害リスク、脆弱さを物語る特集である。これは大阪や名古屋などでも起こりうる災害リスクだ。関心あるテーマなので抜粋して紹介する。リードから―大雨による被害に泣かされた今年の秋。各地で河川が氾濫し、鉄道が寸断された。そんな中でも真っ先に水が流れ込みそうな地下鉄、地下街に大きな被害はなかった。今後も大丈夫なのか。実は国は地下の大規模な浸水を想定。専門家は「災害は起こらないと楽観視するのは、やめるべきだ」と警告する。

地下鉄・地下街 浸水大丈夫？

温暖化 高まるリスク

❷地下鉄入り口から大量の濁流が流れ込む様子をイメージした「荒川氾濫」の一場面―国土交通省荒川下流河川事務所提供
❸大勢の人が行き交う八重洲の地下街―東京都中央区で

荒川上流の 3 日間雨量が 500 ミリに達した午前 4 時、東京都北区で堤防が決壊。町にあふれ出た茶色い濁流は、地下鉄の駅入り口へと一気に流れ込み、巨大「水道管」と化した線路を伝って都心に到達。東京駅の改札は冠水し、中央区、千代田区のオフィス街はすべての機能を失った―。

国土交通省荒川下流河川事務所が動画サイト「ユーチューブ」で公開中のフィクション動画「荒川氾濫」の一場面だ。

2017 年に公開され、再生回数は 46 万回超。足立区や江東区などの「海抜ゼロメートル地帯」を中心に数十万人が孤立し、駅や車が水没する。CG 映像でその様子を衝撃的に伝える。「不安をあおるつもりはない。最悪の場合を知ってもらい、自主的な行動につなげるのが狙い」(同事務所防災企画室)という。

ただ、この映像は、決して大げさではない。国の中央防災会議の「大規模水害対策に関する専門調査会」も 09 年、荒川が氾濫した場合の地下鉄の被害想定を公表している。それによると、北区志茂の荒川右岸で堤防が決壊した場合、約 10 分後に水が赤羽岩淵駅に到達。6 時間で西日暮里駅、9 時間で上野駅、12 時間で東京駅、15 時間で銀座や霞ケ関などに達し、最終的には 17 路線の 97 駅(延長約 147 キロ)が浸水、うち 81 駅が水没する。

元東京都職員の土木専門家で公益財団法人「リバーフロント研究所」(東京)技術参与の土屋信行氏は「東陽町駅など江東区の地下鉄駅の多くは、海抜がマイナスの所にある。北千住駅(足立区)も 5 メートル以上の浸水エリアだ。駅構内にいれば逃げるのも危うい」と予測する。地下鉄が水没すれば、地下で縦横無尽につながる大手町や銀座の地下街も水没する。「オフィスビルの多くは地下に電気設備があり、復旧は長引く。日本経済は大損害だ」さらに不安視されるのは、台風に伴う高潮が、河川の洪水と重なった場合だ。

(2019 年 11 月 14 日)